

青年期及び中年期の死の捉え方

- 自己の消滅・他者との別離の視点から -

内 田 雅 子¹ ・ 中 丸 澄 子²

A Comparative Study on the Attitudes toward Death for

Adolescents and Adults

— From the Viewpoints of Extinction and Separation—

Masako UCHIDA¹ and Sumiko NAKAMARU²

1. 問題と目的

私たちは誰しも、今を生きると同時に死を体験する。この世に生まれた以上、自分自身の死を避けることは不可能である。また、多くの人が身近な他者を失う経験をする。丹下（2004）は、「多くの場合、われわれは自分自身の死を迎える前に、数多くの他者の死に遭遇し、そこから影響を受けることになる」と述べている。このように、他者の死は私たちにとって、心身に変化を生じさせることもあれば、死について考え学ぶ機会ともなる。

他者との死別体験は、通常体験者の年齢が重なるにつれて回数が増加する。つまり、青年より高齢者の方が長く人生を生きているため、他者の死に遭遇する機会も必然的に多くなる。小松（2000）は、「身近な人との死別体験がある大学生の割合について、荒木は 82.1%、渡辺は 84.4%と報告しており、他の報告をみても大体 70～90%程度となっている」と述べている。筆者の研究（内田，2006）でも、身近な人との死別体験がある大学生の割合は、86.0%で上述の研究と一致しており、現代の大学生のほとんどが、身近な死別を体験しているといえる。

では、私たちが他者の死に遭遇した時、その死をどのように捉えているのだろうか。小此木（1979）によると、「現代社会は、人類のこの有限感覚をわれわれの心から排除してしまった（中略）全能感に支配された人間には、対象喪失の悲哀は存在しない。かけがえのきかない絶対の代わりにのきかない存在は、心から排除されてしまうからである」と述べている。また河合（1971）は「死を否定した世界においては、生きる意味のみが表面的に進行し、その裏において、死の体験の停止が生じる」と述べている。このように現代社会は、亡くなったことの事実は理解できても、その死がどういうものなのかというところまで考えることが少ないのではないだろうか。

また、死に対する態度の発達の様相を、様々な研究から丹下（2004）は以下のように述べている。「児童期前半に死の概念が成立するとともに、人は死を恐れるようになる。青年期から成人期にかけて死に対する恐怖は減少から増加へと大きく変化し、成人中期に最も強く死を恐れる。それが再び成人後期において死に対する恐怖が減少するとともに、次第に死を受容するよ

¹ 情緒障害児短期治療施設山口県みほり学園

² 広島文教女子大学人間科学部心理学科

うになっていく、と推測される」。このように、発達段階によって死に対する態度が変化していくと思われる。

青年期の死の捉え方の特徴として、小松（2000）は「他者との別れの悲しみは、他者との一体性を認めるところにある」と述べている。小松（2000）によると、『高校生は死を「悲しい」とするものの、「別れ」と捉えるものは少なかった。竹田の調査においても、「悲しい」、「怖い」といった情緒的反応は高率であったが、「別れ」に触れた者は1割に満たなかった。（中略）日本の現代の青年は、死を悲しいと感じても、他者との別離はあまり強く意識していない。別れと比べて多かったのは、死は「いなくなる・無になる」という捉え方であり、日本の現代青年が感じている死の悲哀は、自己の存在の消滅に向けられたものが強いようである』としている。また小此木（1979）は、『「悲哀を知らない子どもたち」の時代がきた。（中略）彼らは失った対象に自分がどんなに頼り、その愛情で自分がどんなに支えられていたかを知らない。彼らはその対象に向いていた感情、欲望が、なくなってしまったこととしか意識しない』と指摘している。しかし、死を「別れ」と捉える人と、「いなくなる」と捉える人の違いについては言及していない。

では、死を「別れ」と捉える人と、「いなくなる」と捉える人とは何が違うのだろうか。

青年は身近な人との死別を多くは体験していないので、死を自己の消滅、つまりいなくなると捉える人が多いのではないかと考える。また、年齢を重ねるにつれ、何度も死別を経験することによって、死を他者との別離と捉えるようになっていくのではないだろうか。そこで本研究では第一の目的として、青年期と中年期を比較することにより、発達軸にそって死の捉え方がどのように変化するかを明らかにする。

さらに筆者の卒業論文（内田，2006）の結果から、「間接的な死の体験が自殺観に影響し、逆にいえば、自殺に至るほど深い悩みをもつ人に心を寄せる人は、メディアを通じて、間接的な死の体験を自ら求めていくのかもしれない」ということに注目したい。ここでいう間接的な死の体験とは、直接に死別を体験してはいないが、メディアなどを通じて見た死の体験のことである。ほとんどの人がメディアなどを通じて死を見たと思われるのに、見ていないと回答した人がおよそ3割いた。この違いには、死を記憶や心に留めて考えていく人とそうではない人とがあるのではないだろうか。青年の中にも、死を他者との別離と捉える人がいるだろう。他者との別離と捉える人は、葬儀や法事に参加したり、故人の思い出などを家族から聞いたり、故人を大切にす家族・地域的背景があるのではないだろうか。そこで、本研究では第二の目的として、青年の中でも発達段階の高い人（仮に発達軸の中で死を別離と捉える人を上位とした場合）に注目し、死を他者との別離と捉える人の家族的・地域的背景を明らかにし、特徴を検討していく。

2. 方法

(1) 調査対象者

目的に沿って、大学生および女性センターを利用されている方を対象にして、死の捉え方に関する質問紙調査を行った。青年期の対象は、広島県内の私立女子大学に在学中の心理学科生（1年生～4年生）130名に実施、116名を有効回答者とした。また、西日本の政令指定都市にある女性センターを利用されている方のうち、年齢が20代の方1名についても、青年期対象とした。平均年齢は20.1歳（18～24歳、SD=1.36）である。中年期の対象は、西日本の政

令指定都市にある女性センターを利用されている方、女性 82 名に実施し、48 名を有効回答者とした。また、広島県内の私立大学に在学中の心理学科生のうち、年齢が 30 代以上の方 4 名についても、中年期対象とした。平均年齢は 49.4 歳 (32~70 歳、SD=10.3) である。

(2) 調査時期

青年期対象、中年期対象ともに 2007 年 9 月下旬~11 月上旬である。

(3) 調査方法

広島県内の私立女子大学に在学中の心理学科生については、授業中に調査目的を説明した後、調査票を配布し、記入後は即時回収した。女性センターの講座に参加されている方については、二種類の方法を実施した。第一の方法は、職員の方が講座内で調査目的を説明した後、調査票を配布し、記入後即時回収する方法である。第二の方法は、職員の方に随時配布していただき、記入しだい回収する方法である。二つの方法を実施した理由は、より多くの回答を得るためである。

回答はいずれも無記名で行われ、実施時間は 10~15 分であった。また、質問内容の一部に個人の死の体験の想起があり、無理に回答することのないように説明した

(4) 質問紙の構成

① 基本属性

② 育った地域と家族形態

回答者の育った地域と家族形態を尋ねる項目である。それぞれの年代ごと (10 歳未満、10 代、20 代、30 代、40 代、50 代) について、記入を求めた。

③ 家庭における死者の尊重

現在の家庭と育った家庭における死者への尊重を尋ねる項目である。現在の家庭については 5 項目で、「お盆やお彼岸などに墓参りをする」、「亡くなった人の思い出を、家族などと話す」、「亡くなった人のことを考える」などから構成されている。育った家庭については 6 項目で、「自分の家だけではなく住んでいる地域の中で、法事に行き来する」、「近所の人たちも交えて亡くなった人の話をした」、「お盆やお彼岸などに家族や親戚が集まった」などから構成されている。現在の家庭と育った家庭の計 11 項目について、記入を求めた。それぞれ 5 件法で回答を求めた。

④ 死の捉え方、死についての連想

死のイメージを尋ねる項目である。消滅もしくは別離と考えられる文を表記し、どちらか一方を選ぶように求めた。計 10 項目である。消滅の例として、亡くなった人は「いなくなったと思う」、死とは「存在が消滅すること」、人は死んだら「消えてしまう」などが挙げられる。別離の例として、亡くなった人は「もう会えないと思う」、死とは「人と別れること」、人は死んだら「誰とも会えなくなる」などが挙げられる。さらに、死について連想する単語を 3 つまで回答するように求めた。

⑤ 死別体験

死別体験の有無について把握するための項目である。「あなたはこれまでに身近で死を体験したことがありますか」という質問に対し、「ある」と回答した対象者には、次に述べる項目に回答を求めた。その項目は、死別相手、死別体験時の年齢、死の瞬間の臨席の有無、死別相手との親しさである。さらに、死別相手との思い出や死別体験時の気持ちについて、自由記述で記入を求めた。

3. 結果と考察

(1) 死の捉え方の群分け

死の捉え方（計 10 項目）の回答から、死を消滅と捉える回答と別離と捉える回答のそれぞれの合計を算出し、消滅と回答した数の多い対象者を消滅群、別離と回答した数の多い対象者を別離群、消滅・別離のどちらにも偏らない対象者を中間群とし、本研究の分析を行った。

その結果（表 1）、青年期および中年期どちらも 7 割の人が別離群であり、3 群の中では一番多いことがわかる。また、青年期、中年期のどちらとも群の違いはみられない。

表1 青年期および中年期の死の捉え方

| | | N | % |
|-----|----|----|------|
| 青年期 | 消滅 | 22 | 18.8 |
| | 別離 | 82 | 70.0 |
| | 中間 | 13 | 11.1 |
| 中年期 | 消滅 | 7 | 14.5 |
| | 別離 | 27 | 77.0 |
| | 中間 | 4 | 8.33 |

(2) 死の捉え方に関する分析

育った地域と家族形態が、死の捉え方に関係があるかを検討するため、独立性のカイ二乗検定を行った。このとき、育った地域は①都市、②農村・漁村、③その他の 3 群、家族形態は①核家族、②拡大家族、③単身の 3 群、死の捉え方は①消滅群、②別離群の 2 群に分類した。

青年期対象の結果、10 歳未満、10 代、20 代のどの年代とも、地域および家族形態と死の捉え方に関連性はみられなかった。

中年期対象の結果、50 代のみ、地域と死の捉え方に関連性がある傾向がみられた ($\chi^2=6.799$, $p<.10$)。しかし、家族形態と死の捉え方に関連性はみられなかった。

中年期で、50 代にのみ育った地域と死の捉え方に何らかの関係があると示唆されたが、基本的にはどの年代でも、死の捉え方は育った地域や家族形態に関係なく、本人の意見で決定するものと考えられる。しかし、本研究の調査地域は狭く、限られた場所であったため、地域差や家族形態に差がみられなかったということも考えられる。

(3) 家庭における死者の尊重に関する分析

家庭における死者の尊重尺度は、次の 3 つに分類した。全体得点の合計（以下、死者尊重得点）、現在の家庭における死者の尊重得点（以下、現在の死者尊重得点）、育った家庭における死者の尊重得点（以下、育ちの死者尊重得点）である。家庭における死者の尊重得点が高い程、家庭や地域において死者との関わりが強く、死者の存在を心に留める作業をしていることを示している。

① 育った地域

家庭における死者の尊重得点と育った地域に差があるかを検討するため、家庭における死者の尊重得点を従属変数として、育った地域 3 群間（①都市、②農村・漁村、③その他）との平均値の差の検定を行った。

青年期対象者では、死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点について、10歳未満を過ごした地域間に有意な差が見られた ($F(2, 151) = 5.535, p < .01$)、($F(2, 151) = 9.553, p < .01$)。さらに、10代についても同様の結果が得られた ($F(2, 155) = 4.096, p < .05$)、($F(2, 155) = 7.279, p < .01$)。また、死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点について、20代を過ごした地域間に有意な傾向が見られた ($F(2, 119) = 2.436, p < .10$)、($F(2, 119) = 2.723, p < .10$)。多重比較の結果、10歳未満と10代について、農村・漁村で育った人のほうが都市で育った人より、死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点が高いことが明らかになった。

中年期対象の結果、死者尊重得点、現在の死者尊重得点、育ちの死者尊重得点の3群全てにおいて、10歳未満を過ごした地域間に有意な差が見られた ($F(2, 43) = 7.611, p < .01$)、($F(2, 43) = 4.828, p < .05$)、($F(2, 43) = 8.197, p < .01$)。さらに、10代についても同様の結果が得られた ($F(2, 42) = 6.769, p < .01$)、($F(2, 42) = 4.365, p < .05$)、($F(2, 42) = 7.275, p < .01$)。50代についても、死者尊重得点、現在の死者尊重得点、育ちの死者尊重得点において、有意な差が見られた ($t(22) = -3.015, p < .01$)、($t(20.959) = -4.761, p < .01$)、($t(22) = -2.785, p < .05$)。多重比較の結果、10歳未満、10代、50代について、農村・漁村で育った人のほうが都市で育った人より、死者尊重得点、現在の死者尊重得点、育ちの死者尊重得点が高いことがわかった。

青年期では幼い頃の育った地域が、中年期では幼い頃と50代を過ごした地域が、死者を心に留める作業に影響を及ぼしていると考えられる。さらに、農村・漁村で育った人の方が、死者に想いをはせる作業が多いのではないかと予想される。つまり、農村・漁村で育った人のほうが、家族や親戚などで死者の話しをしたり、法事に行き来する機会が多いという背景があるのではないかと推測される。

② 家族形態

家庭における死者の尊重得点と家族形態に差があるかを検討するため、家庭における死者の尊重得点を従属変数として家族形態3群間(①核家族、②拡大家族、③単身)との平均値の差の検定を行った。

青年期対象の結果、死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点において、家族形態間に有意な差が見られた ($t(106) = -2.785, p < .01$)、($t(106) = -3.742, p < .01$)。また、10代における家族形態間にも同様の結果が得られた。($F(2, 110) = 3.377, p < .05$)、($F(2, 110) = 6.012, p < .01$)。さらに、死者尊重得点について20代における家族形態間に有意な傾向が見られ ($F(2, 72) = 3.002, p < .10$)、育ちの死者尊重得点についても有意な差が見られた ($F(2, 72) = 5.028, p < .01$)。多重比較の結果、10歳未満、10代、20代について、拡大家族で育った人のほうが核家族で育った人より、死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点が高いことが明らかになった。

中年期対象者では、死者尊重得点において、10歳未満における家族形態間に有意な傾向が見られ、($t(43) = -1.836, p < .10$)、育ちの死者尊重得点においては、有意な差が見られた ($t(43) = -2.089, p < .05$)。さらに、育ちの死者尊重得点において、10代における家族形態間に有意な差が見られた ($t(41) = -2.057, p < .05$)。また、死者尊重得点および、育ちの死

者尊重得点について 30 代における家族形態間に有意な傾向が見られた ($F(2, 43) = 2.633$, $p < .10$)、($F(2, 43) = 2.539$, $p < .10$)。さらに、50 代の現在の死者尊重得点について有意な傾向が見られた ($F(2, 21) = 2.717$, $p < .10$)。多重比較の結果、10 歳未満について、拡大家族で育った人のほうが核家族で育った人より、死者尊重得点が高く、10 歳未満、10 代について、拡大家族で育った人のほうが核家族で育った人より、育ちの死者尊重得点が高いことがわかった。また、30 代における家族形態は死者尊重得点および、育ちの死者尊重得点について、50 代における家族形態は現在の死者尊重得点と何らかの関係があることが示された。

青年期では幼い頃から現在までの家族形態が、中年期では幼い頃、30 代、50 代の家族形態が、死者を心に留める作業に影響を及ぼしていると予想される。つまり、拡大家族で育った人のほうが、死者に想いをはせる作業が多いのではないかと考えられる。拡大家族では、複数の世代の人が一緒に暮らしているため、戦争など様々な世代の人との会話から、死者に想いをはせていくことが示されているのではないだろうか。

③ 死の捉え方

家庭における死者尊重得点と死の捉え方に差があるかを検討するため、家庭における死者尊重得点を従属変数として死の捉え方の 3 群間 (①消滅、②別離、③中間) との平均値の差の検定を行った。

青年期対象者では、育ちの死者尊重得点について、死の捉え方間に有意な傾向が見られた ($F(2, 114) = 3.010$, $p < .10$)。多重比較の結果、死を消滅とも別離とも捉えない中間に位置する人のほうが、消滅と捉える人より、育ちの死者尊重得点が高いことが明らかになった。

中年期対象者では、死者尊重得点および、現在の死者尊重得点について、有意な差が見られた ($F(2, 45) = 11.431$, $p < .01$)、($F(2, 45) = 5.176$, $p < .01$)。多重比較の結果、死を別離と捉える人のほうが、消滅と捉える人より、死者尊重得点、現在の死者尊重得点が高いことがわかった。

本研究に関する限り、青年期では、死を消滅とも別離とも捉えない中間に位置する捉え方をする群が、死者を心に留める作業を最も多く行っているように見受けられた。この群は、死を別離と捉えるようになる前段階の、死を思案する時期に当たるのではないかと考えられる。

中年期では、死を別離とする捉え方が、死者を心に留める作業に影響を及ぼしていると考えられる。発達軸上、青年期よりも後の段階になる中年期になると、何度も死別を体験することによって、現在のみでも死者に想いをはせる作業をすることによって、死を別れと捉えていくようになると推測される。

(4) 自由記述の分析

青年期、中年期ともに別離と捉える人が多いことが明らかになったので、質問項目の死の捉え方で 8 つ以上を別離と回答したものに焦点を当て、分析を行った。対象人数は、青年期 44 名、中年期 18 名である。

① 死者との思い出

「亡くなられた方 (亡くなった人またはペット) と知り合ってから死に至るまでの間、亡くなられた人とのような時間を過ごされましたか」と教示し、青年期 37 名、中年期 15 名から

回答を得られた。

多くみられた回答は、「一緒に過ごした」、「よく接していた」(青年期 67.5%、中年期 53.3%)であった。さらに、「和まされる、癒し」という回答は、ペットの死を体験していた人にみられた。青年期では、「後悔」、「謝罪」が中年期よりも多くみられた(青年期 10.8%、中年期 6.6%)。

② 死別体験時の感情

「死を知らされたとき、あなたはどんな気持ちでしたか」と教示し、青年期 38 名、中年期 16 名から回答を得られた。

どちらにもみられた回答は、「悲しい」(青年期 21.0%、中年期 25.0%)、「後悔、絶望」(青年期 7.8%、中年期 12.5%)であった。青年期では、「信じられない」、「ショック」という回答が多く挙げられており、この回答は中年期ではみられなかった。中年期では、死から自分の人生を考える記述(例：自分の方向性を考える)や今後の対応を考える記述(例：家族に対する対応を考えた)がみられた。

青年期は死別をあまり体験していないので、ショックや謝罪の気持ちが思い出されたと予想される。一方中年期になると、何度も死を体験していくうちに、死別から様々なことを学んでいると考えられる。そのためショックとは別の気持ちを感じていくようになると推測される。また、死の後に葬式の喪主役を務めたり、喪主を助ける役になったりと、現実的な対応が求められることがあるだろう。そのため、悲しみをじっくり噛みしめるというより、現実対応のことが頭に浮かぶと推測される。

本研究で示されたことは、家庭における死者の尊重、つまり死者を心に留めていく作業の大切さである。死者に関する思い出を家族や親戚から聞いたり、思い出を語り合うことで、死者を心に留めていく作業が繰り返されると考えられる。死者を心に留めていく作業は、死の事実のみだけではなく、死者の存在を反芻することにつながる。つまり、ただ目の前から人がいなくなるという捉え方だけではなく、死者をかけがえのない存在として心に留めていくのではないかと考えられる。死者に繰り返し想いをはせることにより、死者を慈しむ気持ちが生まれ、別れを実感していくのかもしれない。さらに、死者に想いをはせ、心に留めていく作業が繰り返されることによって、自分が死者から受けていた愛情を、感じることはできないのではないだろうか。また、発達軸にそって、死別を何度も体験するとともに、死者に関する思い出を家族や親戚から聞いたり、思い出を語り合う頻度が増加すると考えられる。本研究で得られた、発達軸における変化と家庭における死者の尊重の視点は、死の意義について学んでいく手助けになると期待される。

本研究では、家庭における死者への尊重、つまり死者を心に留める作業の大切さが見出されたが、死者を心に留める作業をより具体的に表す方法を検討していく必要があるだろう。また、青年期と中年期では、死者を心に留め反芻する作業に何らかの違いがあると思われ、検討の余地が残されている。

文献

- 河合隼雄 1971 自殺の象徴的意味についてー心理療法家の観点からー 心理学評論, 14(1), 67 - 79.
- 小松万喜子 2000 日本の現代青年の死生観とその教育課題 佛教大学大学院紀要, (28), 99 - 114.
- 小此木啓吾 1979 対象喪失 中央公論新社.
- 丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15(1), 65 - 76.
- 内田雅子 2006 青年の死生観に関する一研究 広島文教女子大学 平成 17 年度卒業論文